

胆嚢のポリープ性病変：診断と手術適応

Polypoid lesion of the gallbladder; diagnosis and indications for surgery: Yang HL, Sun YG, Wang Z (Br J Surg 79: 227-229, 1992)

超音波あるいは病理学的に胆嚢のポリープ性病変(polypoid lesions of the gallbladder; PLG)と診断された182人の患者での超音波診断の信頼性およびPLGの手術適応について検討を行った。

手術を受けた182例中172例(男93,女79,平均年齢44.3歳)でポリープが肉眼的に認められた。172例のPLGの組織学的分類は, ChristensenとIshakの分類によると159例(92.4%)は良性, 13例(7.6%)は悪性であった。172例のうち140例(81.4%)が30, 40, 50歳台で, 悪性病変は50歳以上の56例中12例(21%)に認められ, 一方, 50歳以上の116例中115例(99.1%)は良性

であった。

PLGの大きさでは, 直径1cm以下の138例はすべて良性で, 1.0~1.4cmの18例中2例が悪性, 1.5cm以上の16例中11例が悪性であった。PLGの個数では単一病変の86例中13例(15%)が悪性病変であり, 多数のPLGをもつ86例では悪性病変は1例も認められなかった。

胆石を伴う47例のPLGのうち悪性病変は7例(14.9%)で, 胆石のないPLGの125例中では6例(4.8%)であった。臨床症状では172症例中28症例(16.3%)が無症状で, PLGは超音波検査で偶然に発見された。しかし残りの144例(83.7%)は, 右上腹部痛や心窩部の痙攣や鈍痛, 消化不良や腹部膨満感などの不快感を訴え超音波検査を受けていた。

PLGと肉眼的に診断された172例のうち155例(93.9%)は超音波検査にて術前にPLGと確診され, 10

症例は慢性胆嚢炎により偽陽性(うちPLGは7例)と診断された。したがってPLG発見における超音波検査の感度(sensitivity)は90.1%(155/172)であり, 経口胆嚢造影の24%(9/37), CTの62%(5/8), ERCPの0%(0/2)より優っていた。超音波検査の特異度(specificity)は93.9%であった。PLGが超音波検査にて発見されなかった17例中16例は胆石と診断され, 1例は胆嚢が胆泥で満たされ発見できなかった。

以上のごとく, PLGの術前診断において超音波検査は第一選択であるが, 良・悪性の鑑別は容易でなく, PLGの大きさや数を確かめることが鑑別の手助けとなる。PLGの手術適応は直径1cm以上のもの, 個数が1個のもの, 胆石を伴うもの, 年齢が50歳以上のもの, 臨床症状があるものなどであると述べている。

(愛知県がんセンター消化器内科

風見 明 抄)